第２号様式（第４関係）

令和５年１月６日

調布市議会議長　小林　市之　様

提出者　調布市議会議員　丸田　絵美

視察等共通部分報告書

下記のとおり，視察（~~研修~~・視察研修）を実施いたしましたので，視察等個別部分報告書（第３号様式）を添えて報告いたします。

記

1　実施名称

令和４年度長崎市平和都市交流

2　実施期日（期間）

令和４年１１月８日（火）から１１月９日（水）まで

3　実施場所（視察先・研修会場）

長崎原爆資料館・国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館・平和公園・平和祈念像・山王神社一本柱鳥居・端島（軍艦島）・長崎市恐竜博物館

4　実施目的

平和祈念事業及び地域振興の取組みについて

5　参加者の氏名

小林市之，丸田絵美，平野充，阿部草太，澤井慧，清水仁恵，狩野明彦，渡辺進二郎，雨宮幸男，川畑英樹

6　実施結果（視察概要・~~研修概要~~）

別紙記載のとおり

7　実施結果に対する所感，意見等

視察等個別部分報告書のとおり

訪問先及び視察概要

1　平和祈念事業について

日　時　令和４年１１月８日（火）午後２時から午後４時まで

場　所　平和祈念像・山王神社一本柱鳥居・長崎原爆資料館・
　　国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館

説明及び対応者

長崎原爆資料館長　篠崎　桂子氏

平和推進課長　　松尾　美香氏

被爆継承課長　　伊福　伸弘氏

国立長崎原爆死没者

追悼平和祈念館長　髙比良　則安氏

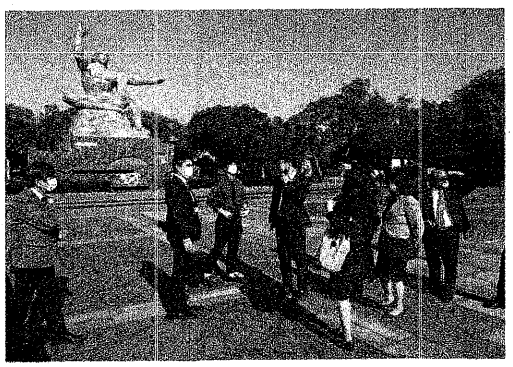
概　要

長崎市の平和行政の新たな柱となる，「平和の文化の醸成」や「被爆の実相を継承する主な取り組みについて」各担当者から資料を用いて説明を受けた。長崎市は被爆７５年の節目が終わり，核兵器禁止条約が発効した令和４年からは，次の節目である被爆１００年に向けてスタートした。これまで，重点的に取り組んできた「被爆の実相の継承」及び「核兵器廃絶の推進」に加え，多くの人が当事者として自分の興味のある分野や身近なところから平和について考えられるように，スポーツや芸術などを入口として，日常の中に平和の文化を根付かせるべく「平和の文化の醸成」（被爆１００年に向けた次の２５年の重要なキーワード）に取組んでいく旨の説明があった。

続いて，被爆の実相を継承する主な取組みについては，青少年ピースボランティアの育成・青少年ピースフォーラム・青少年平和交流・平和学習発表会・平和学習教材・平和記念アピール事業・平和の灯・「語り継ぐ被爆体験（家族・交流証言）」について予算額な

ども含めて具体的な説明や，小・中・高校生の修学旅行の地域の割合や動向の分析について説明を受けた。

また，行程の中で平和祈念像や国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館を訪問し原爆の犠牲者を追悼すると共に，爆心地から８００メートルに位置する山王神社の一本柱鳥居や被爆クスノキ・長崎原爆資料館を視察し，原子爆弾の惨禍について認識を深めた。



2　長崎市副市長への表敬訪問

日　時　令和４年１１月８日（火）午後４時から

場　所　長崎市役所本館３階第２応接室

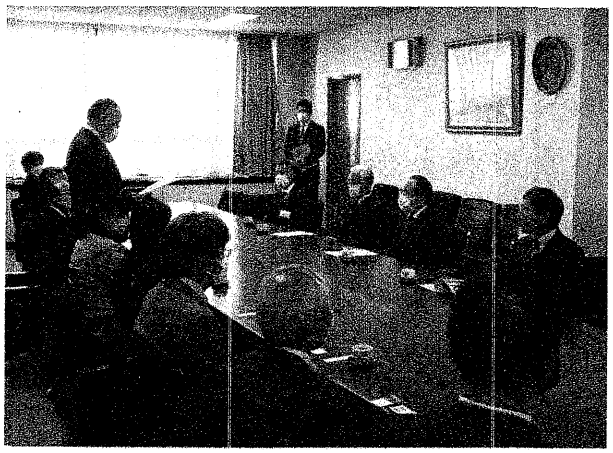
出席者

長崎市副市長	武田　敏明氏
環境部長	北嶋　寛氏
原爆被爆対策部長	前田　孝志氏
長崎市議会議員	佐藤　正洋氏

概　要

小林市之議長から出席者の紹介に続き，受け入れに対する謝意を伝え，訪問の趣旨を述べた後，意見交換を行った。

調布市と長崎市の平和交流は，平成１５年８月の調布市非核平和都市宣言２０周年記念事業の一環として，調布市の小中学生の親子２組が青少年ピースフォーラムに参加したことが最初であった。その後は，会派の視察や調布市としてピースメッセンジャーの派遣やピースフォーラムへの中学生の参加など平和祈念事業を進めており，調布市と長崎市との今後の相互交流などについて意見交換を行った。



3　地域振興の取組みについて

日　時　令和４年１１月９日（水）

午前１０時から午後２時２０分まで

場　所　端島（軍艦島）・長崎市恐竜博物館

説明及び対応者

恐竜研究所長　　早川　昌宏氏

野母崎地域センター長　三浦　高宏氏

概　要

はじめに端島（軍艦島）を視察し，ガイドから炭鉱の仕事に携わる多くの人（最盛期には約５千３百人・１９３０年代の東京都の９倍の人口密度）が，狭い島内だけで生活する様々な様子を，日本最古といわれる鉄筋コンクリート造の高層（７階建て）アパートや小中学校，病院などの遺構を巡りながら，当時の写真を用いての説明を受けた。

その後，長崎市の地域振興の取組みに関し，端島（軍艦島）と長崎市恐竜博物館を活用した地域振興の課題及び今後の展望・現在までのその取り組みの説明を受けた後，長崎市恐竜博物館を視察した。

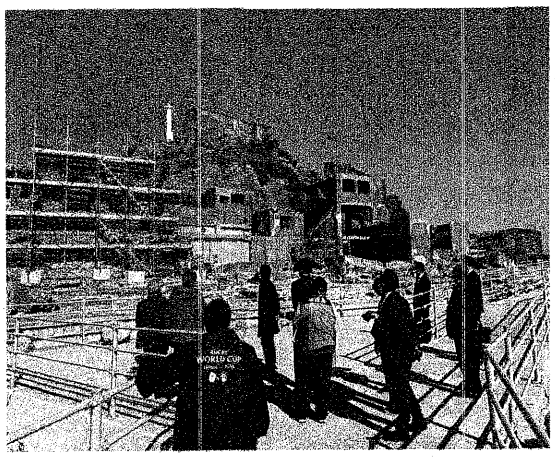
令和３年１０月に開館した長崎市恐竜博物館は，この地域の特色である「恐竜」という資源と海に面した景観を活用し，国際的に通用する調査研究を実践する施設とすることが基本理念となっている。

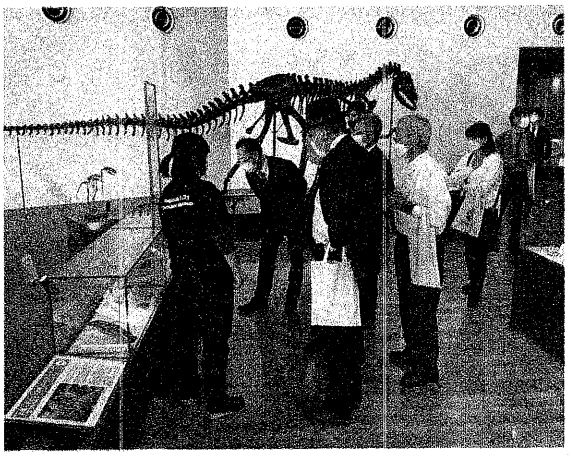
設立の背景には，昭和３７年当時は，日本の恐竜研究の嚆矢（こうし）となる

恐竜化石の発見地（現在は哺乳類の化石とされている）として，注目を集めたこともあり，さらに平成１６年５月以降は恐竜の化石の発見が相次いだこと，「恐竜」という言葉を作り出した，東京帝国大学横山又次郎教授が長崎市の出身だったことなどがきっかけとなっているとの話があり，続いて計画から建設，博物館運営の成果や地域振興への影響について説明があった。

その説明のなかで，当初は来館者数を年間で１２万人と見込んでいたが，新型コロナウイルス感染症拡大の影響がありながらも，これを大幅に超える約２７万人（令和４年１０月末現在）が来館し，利用者満足度（指定管理者設定）も目標値は７０パーセントであったものが，令和３年度実績では８８．６パーセントに達した。

その他，長崎県南部（長崎駅から２４キロメートル・車で約１時間）を訪れる訪問客は，恐竜博物館の開館に合わせた飲食店の新規オープンや各種のイベントなどが奏功し，開館以前の月毎の訪問客数の４千人から，開館後の令和３年１１月から令和４年９月までのひと月あたりの訪問客数は約２千人の増加となり，地域振興に好影響を及ぼしている事例であるとの説明があった。





第３号様式（第４関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	小林市之

１　視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）

長崎市平和都市交流について　　令和４年11月８日～９日

○長崎市武田副市長への表敬訪問について

○長崎市の平和事業について

○長崎市原爆資料館・国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館について

○軍艦島（端島）を活用した地域振興の課題と今後の展望について

○長崎市恐竜博物館の取り組みについて

２　実施結果に対する所感，意見等

（質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）

○長崎市武田副市長への表敬訪問について

平和都市交流訪問団として、長崎市武田副市長、前田原爆被爆対策部長、北嶋環境部長、佐藤前市議会議長に、超党派による10名の調布市議会議員が表敬訪問させていただいた。本市と長崎市との平和交流は、平成15年8月に調布市非核平和都市宣言20周年記念の一環として、小・中学校生の親子２組が、青少年ピースフォーラムに参加したことが始まりであり、それ以来、被爆資料の貸し出しや被爆体験を伝える家族証言者の講話などを実施してきた。その後、長崎市の佐藤前議長と本市の渡辺議長が全国市議会議長会の副会長をされたご縁で、令和２年８月９日の被爆75周年に平和祈念式典に本市の長友市長、渡辺前議長が招待され参列し、それ以来、交流を続けてきたものです。令和３年には、長崎市の佐藤前議長からお声をかけていただき「日本非核宣言自治体協議会」へ本市も加盟し、昨年訪問する予定のところコロナの影響で今回の訪問となり、当日、長崎市の武田副市長との意見交換を行った。

特に、平和祈念像や被爆により片方の柱が吹き飛んだ「一本柱鳥居」、原爆資料館等を視察し、実際に原爆被害の遺稿や展示資料を拝見し、原爆の恐ろしさと投下後の77年にわたる長崎市民のご苦労が忍ばれ胸に迫るものがあり、平和の有難さを感じるものであった。「長崎を最後の被爆地に」していきたいとの強い思いが伝わるとともに、調布市、長崎市の子ども達の交流

を積み重ねていく必要性を武田副市長とも共有させていただき、調布市議会と長崎市議会との平和都市交流を今後も継続していくことを確認した。

○長崎市の平和事業について

長崎市は、今年、被爆75周年の年が終わり、悲願であった「核兵器禁止条約」が発効し、次の大きな区切りである被爆100周年に向けてスタートした年であるとのこと。

被爆100年と言うことは、被爆者がいない時代へのカウントダウンであり、それは国際社会に向けて核兵器の非人道性を訴えたり、国内外の次世代へ被爆体験を語ったりする被爆者が限りなく少なくなってくることを意味するものである。そうした時代が到来しても、被爆地長崎が歩みを止めず前進し続けるためには、国内外の多くの人々が平和を後押しする潮流をつくっていく必要があるとのことであった。

長崎市のこれまでの平和事業の取り組みは、「被爆実相の継承」として、被爆の悲惨さを将来に亘って伝え続けるため、語り継ぐ人の育成や、無言のうちに被爆の実相を伝えるモノや場所の保存活用を図ってきた。また、2つめの柱として、「核兵器廃絶の推進」として、国際社会において「核兵器のない世界」こそ、世界の共通ルールだという流れを確立するため、市民社会が声を上げる環境をつくってきた。

そこで、これまで重点的に取り組んできた「被爆の実相の継承」と「核兵器廃絶の推進」の2つの柱に加えて、令和3年度から、より多くの人が当事者として、自分の興味のある分野や身近なところから平和について考えられるよう、スポーツや芸術などを入り口にとして、日常の中に平和文化を根付かしていく「平和の文化の醸成」に取り組み、その一環として、「平和の文化認定事業」を実施している。例えば、長崎から世界へ「ピースなTシャツ」事業として、全国からTシャツのデザインを募集し、Tシャツ代金2,000円のうち500円を寄付するものや、令和4年度には、長崎塀吾祈念茶会など、小さな行動であっても平和に繋がると感じられる事業や身近なところから平和を考える事業を「平和の文化認定事業」として認定することで、その取り組みを広く周知することで応援し、平和の輪を広げることに繋がっているとのこと。

更に、「平和の新しい伝え方応援事業」では、被爆の実相や核兵器につい

て、より多くの人に届くアイデアと伝え方の取り組みを広く募集し、最大20万円を補助している。令和3年度の事業の一つとして、「被爆者の今を伝えよう！フォトグラファー体験」は、若者と被爆者とのワークショップで、写真の撮り方から取材までプロが教える体験授業を認定。そのような取り組みを支援したことで、時代に応じた新しい伝え方にチャレンジする機会の創出に繋がるとのことであった。

被爆の実相を継承する取り組みの一つに「青少年ピースフォーラム」があり、その事業に調布市の子ども達も参加している。これは平和祈念式典にあわせ、全国の自治体が派遣する平和使節団の青少年と、長崎の青少年が一緒に被爆の実相や平和の尊さを学習し、交流を深めることで平和意識の高揚を図ることを目的にしている事業であり、令和3年度はコロナ禍のため8名の調布市の子ども達がオンラインで参加、令和4年度は12名が実際に現地に参加している。持参した調布市内で折られた千羽鶴を平和公園に奉納したが、全国から奉納される数多くの千羽鶴は再生し「しおり」にして配布しているとの話しも聴くことができた。これからも調布の子ども達を長崎に派遣する事業を継続させていかなければと強く感じた。

○長崎市原爆資料館・国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館視察について

この資料館では、被爆資料や被爆の惨状を示す写真などの展示をはじめ、原爆が投下されるに至った経過、核兵器開発の歴史、平和希求などのストーリー性のある展示が行われていた。常設展示室では、被爆した浦上天主堂の側壁の再現造形などにより、被爆直後の長崎の惨状を示す写真、映像資料が展示されていた。展示室の入り口には、1945年8月9日11時2分を指して止まった柱時計が、一瞬にして長崎の街が破壊されたことを物語るものであり、各展示コーナーを資料館の館長に詳しく説明していただいたが、館長自身も身内の方を亡くされたのか写真を凝視できない姿を拝見し、私自身も胸に迫る思いであった。当時の長崎市の人口は23万人で、現在の調布市の人口とほぼ同じであり、その3分の1である74000人が、その年の12月までに亡くなったと聞き驚くともに、その数字を調布市民に当てはめたときに、自分の身内や友人、隣近所の方の多くが一瞬で原爆の犠牲になられたのかと我がごととして感じることができた。

企画展示では、「未来へつなぐ令和原爆の絵」が展示され、丸1日同行し

ていただいた前長崎市議会議長の佐藤氏の絵もあり、当時2歳の時に被爆されており、直に原爆の被害にあった方から直接に話しを聞く機会に改めて原爆の悲惨さを感じた。

国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館には、192310名の亡くなった方々の名簿が196冊と、また、家族全員が亡くなり氏名等が不明の方の分として白紙の名簿が1冊納められ、毎年の慰霊祭に平和祈念式典で奉納されているとのことであった。水を求めて亡くなった方々を慰霊するように水をテーマにした祈念館であり、厳かで神聖な気持ちで慰霊することができた。

○軍艦島（端島）を活用した地域振興の課題と今後の展望について

軍艦島は海底炭鉱の小さい島で、岸壁が島全体を囲い、高層の鉄筋アパートが立ち並ぶその外観から軍艦に似ていることから軍艦島と呼ばれるようになり、最盛期の1960年には約5300人が住み、当時、人口密度は東京の9倍で、日本一の人口密度であったとのこと。島内には、小中学校や病院などを完備、映画館やパチンコホールなどの娯楽施設があり、島内ですべてのものが賄うことができ、逆を言えば、島を出てしまうと海が荒れて戻れないとのことでこのような施設が完備されていた。炭鉱の石炭は良質で、日本の近代化に大きく貢献した場所であったが、1974年に閉山となり無人島となった。炭鉱閉山後、2015年に世界遺産として登録され、日本の近代化を支えた石炭産業の歴史を伝えている。

地域振興の取り組みとして、軍艦島クルーズが市の中心部である長崎港から4隻、野母崎港から1隻が出発し、軍艦島を回遊し島に上陸。世界遺産を見学するコースがある。現在、長崎港から軍艦島を周遊し、野母埼港までの航路を長崎半島クルーズとして事業化に向けて実証実験を行っている。これは、軍艦島クルーズの大半が長崎港を出発し帰港してしまうため、野母埼地区への誘客に繋がらないことが課題であり、実証実験の結果次第では野母埼地区への地域振興に繋がるものと期待するとともに、特に、この地区は高齢化率50%であり、この地区でのイベントを多く開催することで交流人口を増加させ、今後の移住や定住に繋げていきたいとのとのこと。

○長崎市恐竜博物館の取り組みについて

長崎市恐竜博物館は、日本で3カ所目となる恐竜専門の博物館であり教育施設でもある。長崎の沿岸部である三ツ瀬層から、10メートル級のティラ

ノサウルス科の歯や、国内最大級のパドロサウルス科の化石など白亜紀後期の貴重な標本が数多く産出している。国内の自然史博物館では数少ないＸ線ＣＴスキャナを導入している研究室や、岩石から化石を削り出すクリーニング室など、まじかで化石研究の様子を見ることができる教育施設である。

恐竜博物館のある野母埼地区は過疎地域であり、国の過疎地対策関係の財源を活用し建設決定から４年の短期間で開設し、展示室に設置してある大型恐竜の骨格は、長崎の「出島」で交流のあるオランダから寄贈されたレプリカとのこと。また、オープンラボとして、資料工作室、収蔵庫、化石クリーニング室、Ｘ線機器室など、恐竜研究所としての意味合いを強く感じた施設であり、長崎の資料を収集、保管し、国際的にも通用する調査研究を実践している施設であった。

特に、来館者も年間 27 万人と建設時の来館者見込みを倍増し、利用者満足度も 90％に近いものであり、また、地域振興の成果では新型コロナウイルス感染症の影響がありながらも、長崎市南部を訪れる人は増加しているとのこと。平成 29 年度以降、飲食店の新規オープンも 10 店舗あり、タコ祭りなどの新たなイベントにも取り組み、移住者も増加しているとの報告であった。また、建設費の総額は約 19 億円、全額過疎地対策で国からの補助であり、博物館の運営は指定管理者に委託し、企画展の開催、ワークショップの実施、恐竜博士養成講座、ミュージアムショップの運営等をしているが、教育施設でもあることから赤字でも運営できるとのことであった。過疎地対策という国からの補助金で建設し、更に、教育施設とのことで運営費補助もあることを聞き、地方における過疎地対策は大きな課題となっていることを改めて痛感したところである。

３　その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

今回、調布市議会にとって初めての正副議長を含む各会派から選出の超党派 10 名による訪問であり、原爆の被災地である長崎を訪問し、直接に被爆者である方々と交流し平和の尊さについて考えることができた。今後とも、調布の子ども達を長崎に派遣することの重要性を行政に働きかけていくことが大事である。また、意義のある平和都市交流訪問であり、来年度以降について、残りの議員が参加できるよう予算措置を検討すべきである。

視察等個別部分報告書	作成者氏名	丸田　絵美

1　視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）

令和４年度　長崎平和都市交流

2　実施結果に対する所感，意見等
（質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）

＜平和記念公園　原爆資料館他＞

本市においても中学生のピースメッセンジャーの派遣事業などで交流がある、長崎市との平和交流という目的で、議員団が派遣となった。

まずは、長崎の被爆地象徴である、各被爆である一本柱鳥居、被爆くすのき、平和祈念像と回って、長崎原爆資料館へと繋いで頂いた。幸いにもお天気に恵まれ、坂の多い長崎の、山王神社までの道のりに課外学習の児童と思われる子どもたちの学習を横目に、被爆くすのきや一本柱鳥居へと案内を受け、説明をいただいた。子どもたちの真剣な学習に引けを取らない真剣さで、大人もみんな楠の生命力や一本になってなお後世に姿をとどめ、訴え続けている一本柱の力強い姿を拝見し、さらには平和公園にある堂々とした平和祈念像へと続き、原爆資料館へ。資料館の学習室において、レクチャーを受けた。長崎市がこれまで取り組んできた「被爆の実相の継承」「核兵器廃絶の推進」に加えて、令和３年より始まった「平和の文化の醸成」（日常の中に平和の文化を根付かせる取組。被ばく100年に向けた次の25年のとても重要なキーワード）への取組について説明を受けた。多くの人が当事者として平和について考え、行動し、平和の輪を広げる活動を応援することが狙い。市はスポーツや芸術などのイベント等と連携した新たな取り組みや活動を認定し後援することで、時代に応じた新しい伝え方にチャレンジする機会の創出に繋げている。

コロナ禍において、観光の数は激減したが、修学旅行の候補地として注目されてきて、近年は修学旅行者による入館数が増加している。

長崎市被爆継承課による取り組みの多くは青少年ピースボランティア育成事業である。様々な視点から平和について考え、行動することで被爆体験の継承と平和意識の高揚を図ることを目的としている。中学生を除く15歳からおおむね30歳の若者が200人近く登録している。また、青少年ピースフォーラムでは、調布市を含む、全国から18自治体178名が参加している。被爆体験の講話などを聴く、長崎の原爆実相について学ぶ、平和について考えるといった内容を１泊２日で行っているが、そこまでの期間に調布市でもサポートしながら事前学習を行っている。また、本市においては、帰宅後の報告会や交流会などで、振り返りを行いつつ、平和の大切さを市内に広げる活動を担っている。（まもなく報告会が開催予定である）

長崎市では、このほか、青少年平和交流事業（少年平和と友情の翼：市内中学生の派遣と那覇市との交流）、平和学習発表会（ピーボ＝ピースボランティアが運営。長崎市の各中学校での取り組みを促進、発表は年に２校。発表資料は全市に配布）このほか、平和学習教材の作成や各種資料作成、イベントの開催などを積極的に行っている。

先ほども触れたが、わが調布市においても、交流に参加させていただき、「長崎が最後の被爆地であること」の重要性。被爆経験を風化させない取組、平和の大切さ等々、学ぶ事柄が多く、引き続きたくさんの学習、交流ができるよう、関係を深めていただきたいと願う。武田副市長表敬訪問に

おいても、同様の訴えをしたところであるが、先方からも同様のご意見が頂けた。せっかく関係がつながったことであるから、今後の交流を深め、調布市においても、強いきずなで平和について繋がる関係が保てるよう今後の取り組みに期待するところである。

＜地域資源の取組について＞

○軍艦島

2015年、世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産～製鉄・鉄鋼、造船、石炭産業～」として正式登録された通称「軍艦島（正式名：端島）」に上陸させてもらった。最盛期には5300人が住み、当時東京の約9倍83600人/㎢と当時日本一の人口密度であり、世界中を探しても、いまだに世界中の過密都市と比べても、比較にならないそうだ。さらに、工業地帯等住めないところを除き、居住地域だけで計算をすれば、1メートル四方に20人が住んでいた計算になるという。島内には学校から病院、娯楽施設などがあり、お給料が平均に比べてかなり上で生活レベルは高く、利便性が高い「島ライフ」を送っていたことが覗える。カラーテレビやエアコンなどといったいわゆる「3種の神器」普及率は日本一であったという。

但し、仕事はきつく坑内では事故や病気などを発症することも多いことから、途中で逃げられないような工夫が必要で、島への出入りが不便であるとか、家族の生活が豊かでよそではこのレベルの生活は難しいことを確認するなど、労動力の確保が必至であったという。

現在はどんどんと風化が進んでしまうこともあり、何とか保全をしているが、新設ならば簡単であるが「遺構」であるがための苦労や工夫があるという。「半ば崩れがかった」ものを崩れがかった状態でとどめる難しさを語っていた。観光の方面では進めたいが、天候に左右されることや、崩れているところが多く危険であることから、一度にたくさんの見学が難しいことなど、世界文化遺産の保全には大変な面が多いのだと改めて感じた。

○ 長崎市恐竜博物館

平成29年。軍艦島からほど近くの野母崎地区に恐竜博物館の建設を決定してから、令和3年10月に開館を迎えた恐竜パーク。この土地は日本の古生物学の父といわれた「横山　又二郎（「恐竜」という言葉を作り出した人物）」の出身地であり、日本初の恐竜化石が発見されたといわれた場所でもある。また、近年も化石の発見が相次いでいる場所でもある。

3　その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

今回は、長崎市のご厚意で大変充実した交流ができたことは、また、長崎のあちこちをご案内していただき、平和事業はもとより世界遺産と新たな事業についても、ご教示いただき、予想外に県内を見て回れたことは幸いであった。交流として、財力の違いを感じながらも、ぜひ本市にもおいでいただけるような機会があったらと思う。

特に平和事業については、「最後の被爆地にしたい」という強い思いの下、次世代の育成にも力を入れているところでもあり、わが調布市においても、ピースメッセンジャー育成について通じるものが多い。引き続き、たくさん学ばせていただくよう、今後とも交流を続けていきたいと願う。

軍艦島事業においては、本文内でも触れているが、地域振興としては天候に左右されるなどの他、大半が長崎港から出港するため、野母崎地区への誘客には繋がらないといったことも挙げられていた。同じ長崎市内ではあるが、南総合地区としては難しいものがあるのだろうと推察する。
軍艦島の風化・劣化に対し維持保全に関してもご苦労が多いとのこと。
　さらに、恐竜博物館においては、今後の展開、起爆剤と資するよう取り組んでいくことが重要で、どのように活用につなげるのか、すでに施設は作ってしまっているので、ＰＲを含めて活動の促進につながるよう事業展開が重要であるとのこと。立地的にはなかなか難しいと感じてしまうが、長崎は駅近辺だけではないという側面をうまく引き出し、繋げられることを期待している。

第２号様式（第３関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	平野　充

１　視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）

【長崎市】長崎市の平和事業（原爆資料館・追悼平和祈念館）
原爆被爆対策部・原爆資料館　被爆継承課＆平和推進課

【長崎市】地域振興の取組み（恐竜博物館）
長崎市教育委員会生涯学習課

令和４年11月８・９日

２　実施結果に対する所感，意見等
（質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）

○平和事業の取組みについて

昭和２０年８月９日、午前１１時２分。
当時の長崎市人口は約２３万人。現在の調布市とほぼ同じ。
原爆が投下された長崎では２３万人の約３分の１の人たちが原爆で命を落とした。
　令和の時代に入った現在でも「聞取り」が続いている。
「長崎を最後の被爆地に」との、あまりに重いキャッチフレーズは私自身も責任を感じずにはいられなかった。
　現在、長崎市内の小学生の子供たちの中にも「なぜ、８月９日は登校日なのだろう」と不満に感じている子も少なくない中、どこよりも平和を発信していこうと責任を自覚する長崎市の苦しみにも似た深く重い課題があった。
　このような中、次世代の平和後継者を育てるための事業として、長崎市ではピースボランティアとの形で高校生から２４歳までの青年世代の市民が「平和を語れるように」との育成がなされていた。（登録者数１７１名）ピースボランティアの年間予算は約６４００万円余。また、調布市からも平和使節団として選抜された中学生を派遣している全国からの受け入れピースフォーラム事業の年間予算は約３０００万円。令和３年度実績としては全国１８自治体からの平和使節団派遣の中に調布市からも８名の未来っ子使節が含まれていることが誇らしく思えた。そして、長崎市の未来っ子もまた、地上戦が行われた沖縄への派遣事業が行われていた（予算は６２００万円余）、更に、長崎市の中学生が日頃の平和学習の成果を発表しあう学習発表会が行われている。市内各校から代表１人が出席し、班をつくり全員参加型の学習会になっている。（予算は７００万円余）。長崎市の小中学生は平和学習教材として小学生版と中学生版があり、学ぶ（受け身）形ではなく、対話型授業の手引書になっていて、空白の欄やページが多く、自ら書

き込み式の形がとられている。これらの取組みを通して私が感じたことは「平和への行動者」を育成していこうとの長崎市の真剣かつ責任を自覚された姿でした。
※長崎市記念館・資料館を含めた平和関連の年間総予算としては４億３０００万円に及んでいた。
原爆ですべてを失って７７年が経ち、今、長崎市は美しく、これからまだまだ綺麗な街並みへと発展中であった。
原爆資料館をはじめ、平和を祈念する場には、あちらこちらにきれいな水が流れていた。投下直後、水を求めてさまよい尊い命を落とされた方々への深く静かな追悼の心を感じた。
原爆死没者名簿が納められた国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館には、今もなお追加奉安されていた。
今回の長崎市への平和都市交流視察は改めて平和への行動者としての生涯を誓う機会となりました。

○地域振興の取組みについて
長崎市は観光地でもある。海と傾斜の街並みは実に美しく、出会う長崎の人たちの心もまた美しく感じた。
南北に長い都市でもあるが、南部地域は観光地といえども、県庁や市庁、平和祈念館がある地域とは違い、ひっそりとした田舎の空気を感じる。
そんな中、南部地域の振興との観点から「恐竜博物館」という、公共の箱物を整備するには賛否あったと推測しました。しかし、実際にはその取組みが功を奏しているように感じました。淵源は昭和３７年、長崎市内（高島炭鉱の海底９００ｍ）から恐竜の化石が発見され（現在は哺乳類の化石とされる）、近年では平成１６年に発見された恐竜化石がティラノサウルス科の大型種の化石であることが判明。
また、シーボルトを通してオランダのライデン市との縁があり、現在は姉妹都市にもなっており、ライデンの博物館が唯一長崎市にティラノサウルスのレプリカを許可され、本物の化石はライデン、同じ寸法のレプリカが長崎市にだけある。恐竜好きの人や子どもたちには「たまらない」博物館でもあろうと感じる。展示ルームのガラス張りの窓からは軍艦島も眺められる。
長崎恐竜博物館は令和３年に整備されて、まだ１年しか経っていなく、最初からコロナ禍でのスタートオープン。
整備前の南部地域の観光客数は月に４０００人前後であったものが、恐竜博物館整備後は、コロナ禍なのに月に６０００人を超えている。
この恐竜博物館を中心にイベントや飲食店の新規オープン、地域振興、活性化に成功していた。

３　その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

特になし

第３号様式（第４関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	阿部草太

１　視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）

Ⅰ：令和４年１１月８日　平和学習・平和祈念事業・次世代への継承

Ⅱ：令和４年１１月９日　地域振興の取り組み

２　実施結果に対する所感，意見等

（質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）

① 平和学習・平和祈念事業・次世代への継承

長崎原爆資料館にて、原爆被害の悲惨さを感じた。

＜長崎を最後の被爆地に＞と言う考えのもと、原爆の恐ろしさ等を次世代に繋いでいく取り組みがされていた。

被爆者の多くが高齢化し、語り継ぐ為に被曝していない世代に、被爆の実相を継承している。

若い世代に対して、青少年ピースボランティア育成事業を通して、１５歳から３０歳の１７１名に被曝の実相や戦争被害を学び、様々な視点から平和について考え、行動する事による平和意識を高揚させる取り組みがされていた。

平和事業においては、被爆者の高齢化などもあり若い世代・次世代に繋いでいく難しさも感じた。

② 地域振興の取り組み

端島（軍艦島）を生かした観光による地域振興を学ばせていただいた。

１９７４年に閉山になってから、地元の方は端島が観光資源になるとは考えていなかったと伺った。

この様な経緯から、来訪者が考える魅力・観光地は、地元住民では気がつかない事があると理解した。

恐竜パークを野母崎地区にオープンした事により、近隣の飲食店に客が増えた事により出店する店舗も現れ地域活性化の機運が高まっている。

3　その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）
平和事業においては、調布市としてもピースメッセンジャーなどをとおして、市内の子供達にも平和教育をより推進していくべきだと考える。 地域振興においては、市内に在住していると気が付けない調布の魅力を他の地域や外国の方からヒアリングして観光事業に繋げていくべきだと考える。

第３号様式（第４関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	澤井　慧

１　視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）

長崎市平和都市交流　（令和４年 11 月８日～9 日）

視察先：原爆資料館・追悼平和祈念館・平和記念像（11 月８日）

軍艦島・野母崎文化センター・長崎市恐竜博物館

２　実施結果に対する所感，意見等

（質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）

①原爆資料館・追悼平和祈念館・平和記念像

長崎市は 1945 年８月 9 日のプルトニウム型の原子爆弾投下によって多くの尊い命が奪われ、壊滅的な被害を受けた。その復興を遂げ、現在は核兵器廃絶と世界恒久平和を希求する「国際平和文化都市」としての都市づくりを推進している。

本市では、戦争を知らない若い世代が、原爆資料館等被爆関連施設の見学を通じて、戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを知り、派遣体験を活かして次世代への継承・市民への平和啓発を目指す事業として、例年「ちょうふピースメッセンジャー」10 名程度が広島や長崎に派遣されている。今回の視察は更なる平和行政、平和教育の施策の拡充に資する事を目的としている。

今回の視察の目的の１つである原爆資料館は原子爆弾投下に関する資料を取り扱った長崎市立の資料館である。入口に入ってまず目にするのは、77 年前の８月 9 日に原爆が投下され 11 時 2 分を指して止まったままの時計と、その隣には「長崎を最後の被爆地に」というスローガンだ。その先には「原爆による被害の実相」や「核兵器のない世界を目指して」をテーマとして資料や写真や解説パネルなどが展示されている。原爆投下までの経緯や国際色豊かな街並みから一瞬にして焦土と化した爆心地周辺と熱線によって焼け焦げた人々の写真など言葉に出来ない写真が数多く並べられている。

長崎市では被爆継承課があり、市内の全小・中学校で被爆者の語り部による被爆体験講話を実施しているが、被爆者の高齢化による語り部の減少が課題となっており、次世代への継承のため、発信力を強化している。その取り組み事例として、世界平和祈念ポスター作成や標語展の開

催、平和学習発表会や小中学生が作ったキャンドルの点灯する平和の灯など、参加型、発表型、対話型の事業で3000万円近い予算を計上している。戦争の悲惨さというと原爆投下が想起されるが、太平洋戦争末期に県民を巻き込んだ唯一の地上戦が展開された沖縄県や幼い子供たちを守るために多く若者が自らの命を犠牲にして特攻隊員として飛び立った鹿児島県知覧など、様々な観点から戦争を知る機会の拡充に努めたい。

②軍艦島を活用した地域振興事業

軍艦島は 2015 年世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」として正式に登録された。最盛期の 1960 年ころには 5300 人ほどが住んでおり、島内には小中学校や病院、スーパーマーケットなど衣食住は基より、映画館やパチンコホールなどの娯楽施設も整備された。当時新三種の神器と言われたカラーテレビやエアコンは全世帯（当時の普及率は10%程度）にあったといい、本土と比較できないほど労働者の所得が高かったと言える。軍艦島の石炭はとても良質で日本の近代化に大きく寄与したが、エネルギーが石炭から石油に移行したことで衰退し 1974 年に閉山された。現在は長崎港や県南の野母崎から観光者向けのクルーズ船が出ており、軍艦島は長崎市の大きな観光資源となっている。今回出航した野母崎には令和 3 年 10 月に恐竜パークのオープンに合わせて、新たに飲食店や温泉宿泊施設がオープンし、本年 9 月末からは長崎港と野母崎港間を結ぶ「長崎半島クルーズ」を試行的に開始した。恐竜パークの入館者増に伴い近隣施設への来場者は増加しており、地域活性化に向けて機運が醸成されている。まさに地域資源を最大限活用し、観光客を市内に周遊させようといったアイデアが盛り込まれている。本市においてもゲゲゲ忌に合わせて水木しげるさんゆかりの地を巡るスタンプラリーが開催されている。市域全体を周遊する企画を立案することで、駅前周辺だけでなく市内にある様々な観光資源をさらに有効活用できると考える。

3　その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

第３号様式（第４関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	清水　仁恵
１　視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）		
令和４年度　長崎市平和交流　調布市議会　行政視察		
２　実施結果に対する所感，意見等 （質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）		

平和祈念事業について

原爆資料館において、長崎市における被爆の実相を継承する主な取組について長崎市被爆継承課よりお話しを伺った。長崎市では特に次世代への継承に注力されており、以下に具体的施策を記したい。①青少年ピースボランティア育成…中学生を除く１５歳以上３０歳未満の青少年対象（登録者１７１名）②青少年ピースフォーラム…全国の自治体が派遣する平和使節団の青少年（１８自治体１７８名）と、長崎の青少年（ピースボランティアからの参加４６名）③青少年平和交流…長崎市内中学生を対象（公募３０名）④平和学習発表会…全市立中学校と参加希望のある市内私立中学校の生徒代表・教員・保護者（約１５０名）と、被爆地当地における取組は充実したものであった。

被爆地・広島出身の私は、予てより戦争体験を有し、次世代へとその経験を語り継ぐことができる人々の高齢化によって、若い世代や子どもが戦争について直接学ぶ機会に乏しくなっていることを懸念して来た。平成２５年第４回定例会では平和への取組のさらなる推進を求め一般質問を行った際、２０２０年には被爆者の平均年齢が７８歳を超えることも当時に指摘し、調布市から被爆地へ市民を派遣し平和な社会を後世に継承することを求めた経緯もある。

今回長崎市を直接訪問し、担当課からの話を伺うに、その取組からは特に次世代へ継承することが昨今では強化されている様に感じた。

調布市では昭和５８年に市議会による「調布市非核平和都市宣言」が、平成２年に市による「調布市国際交流平和都市宣言」が行われていることから、それらの節目の年などに被爆地市民派遣が実施されていた過去も数回数えるが、令和元年より中学生をピースメッセンジャーとして被爆地へ派遣する市民派遣事業が継続（新型感染症の影響に

よる中止の年も含む）されるに至ったことについては評価しており、親子での被爆地派遣などさらなる拡充も求めたいと考えている。

一方で、長崎市では被爆１００年という年を見据え、国際社会に向けた核兵器の非人道性を訴えたり、国内外の次世代へ被爆体験を語れる被爆者が限りなく減少する懸念から、被爆者がいない時代が到来しても国内外の多くの人々が平和を後押しする潮流を作っていく必要があると考えられていることから、調布市においても市民ひとりひとりが平和を後押しすることのできるといった観点を持った被爆地市民派遣に留まらない施策の新たな展開が重要と感じる。

長崎市では、これまで重点的に取り組んできた「被爆の実相の継承」と「核兵器廃絶の推進」に加え「平和の文化の醸成」に取り組むとされ、被爆者がいなくなる時代にも持続可能な仕組みが必要と考えられており、国内外の多くの市民が当事者として平和を考え、行動する機会づくりが重要であることから、芸術やスポーツなどを通してその活動の入り口を増やしていき、核兵器のない平和な世界実現を目指すとされている。

以下に長崎市の取組を記したい。①平和の文化認定事業（令和３年度開始）②平和の新しい伝え方応援事業（令和３年度開始）③平和の文化キャンペーンの展開（令和４年度開始）など長崎市の直近に開始された取組からは、市民に身近なところから平和の文化を日常に根付かせる具体的施策が求められると感じた。

調布市が加盟している平和首長会議においても、昨年７月、新たに策定されたビジョンには、これまで掲げてきた「核兵器のない世界の実現」「安心で活力のある都市の実現」、新たに「平和文化の振興」が加えられ、本年開催された総会において新ビジョンの下、加盟都市がより一層連帯を強めながらたゆまずに行動することを誓った「ヒロシマアピール」が採択されたことからも、「平和文化」という新たなキーワードについて、調布市ではどの様に考え、具体的施策展開を図るのかが問われている様に思う。今後に期待するものである。

第３号様式（第４関係）

地域振興の取組について

軍艦島（端島）を活用した地域振興の課題と今後の展望、その他持続可能な地域活性化の実現に向けた取組とその課題についても視察を行った。

九州地方の観光地としても賑わう長崎市では、観光をひとつの産業の柱と捉え、過疎化する地域の抱える課題に対し観光を通して解決することにも注力されている。

平成２７年に世界文化遺産として明治日本の産業革命遺産～製鉄・鉄鋼・造船・石炭産業～として正式登録された軍艦島（端島）には平成２１年より、多くの観光客が上陸ツアーで訪れており平成２９年にはその数３０万人に届く勢いであったと聞いた。この間のコロナ渦により、観光客が減少していることは止むを得ないが、恐竜博物館も含めこれら地域の観光資源を今後とも大いに活用できれば、それらが長崎市への訪問のきっかけとなったとしても、国内外から訪れる多くの観光客が同時に被爆地・長崎の過去の実相を知る行動を取ることにより、平和の文化が醸成されるのではないだろうか。核兵器の無い平和な世界の実現に繋がることを願うものである。

３　その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

令和４年度第４回市議会定例会にて、今回の視察を経て、国際平和を市民が身近に考える機会につながる施策が重要と考え、いくつかの提案を行った。

第２号様式(第３関係)

視察等個別部分報告書	作成者氏名	狩野明彦

１　視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）

視察研修

長崎県長崎市

１）　平和祈念事業、平和公園、原爆資料館、
　　国立原爆死没者追悼平和祈念館

２）　軍艦島（端島）、恐竜博物館

２　実施結果に対する所感，意見等
（質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）

１）平和記念事業　他

次世代への継承・平和学習・平和記念事業について７つの事業の説明を受けた。

①「青少年ピースボランティア育成」はすべての事業の基幹となり、略して「ピーボ」と呼ばれる青少年が自ら中心となり企画立案、準備、実行までの活動を行っているのが素晴らしい。

平成１４年から行われてきた「ピーボ」の育成は、登録者が現在171名、今までに1,000名以上が登録されてきた。

②青少年ピースフォーラムは、平和祈念式典に合わせて調布市の中学生を含めた全国の自治体が派遣する平和使節団の青少年）と長崎の青少年とが一緒に被爆の実相や平和の尊さを学習し交流を深める事業で、前出の「ピーボ」が企画し進行や案内などをつとめている。
（令和３年度はオンライン実施で18自治体178名ピーボと合わせた総勢は224名）多くの地域の中学生が、一堂に会するのがすごい。

③青少年平和交流事業では、市内の中学生を公募により30名、沖縄に派遣し那覇市の中学生と交流学習、これにもピーボが参加し連携を深めると共に次世代の育成を図っている。

④平和学習発表会では、代表校２校による発表を参加した生徒が班に分かれて発表を行う全員参加型に変更、令和３年度はコロナの為、発表資料を全中学校へ配布した。一方的な聞くだけの学習ではなく、自ら考える事で他人事ではなくしている。

⑤平和学習教材は、小・中学生には平和学習の教材を配布しているが、これも自ら考えてもらうため空欄を多くしているとの事。
また、絵本や紙芝居は被爆者の体験などを中学生が作成したり、コンクールにて公募したりしている。

⑥原爆犠牲者慰霊・世界平和祈念市民大行進、世界平和祈念ポスター・標語展、平和の灯、⑦語り継ぐ被爆体験は、日本全国や世界に向けて恒久平和の実現を訴える事業であり、同時に次世代への継承を推進している。

資料館等についての感想としては、広島の平和祈念資料館がオドロオドロしい蝋人形などを展示しているのに対して、映像や歴史的背景などを中心に展示公開されているのには好感を持った。

３）　軍艦島　他

長崎市の主要な観光地巡りであったがどれも単独で十分に魅力がある観光資源であった。特に、軍艦島だけではなく野母崎半島全体を考慮した観光プランやクルーズ、物産や飲食など、実証実験を含め様々な取組をされており、地域経済にも好影響を与えている。

今は、コロナ禍であるが今後の取組をさらに期待したい。

○今後の課題として

「平和都市交流事業」の長崎への調布市内中学生の派遣の要望は、自ら考える平和教育を推し進める、長崎市の取組み方に共感しての事であった。戦争の悲惨さをより多く伝えるよりも、未来を担う次世代の子ども達に平和の尊さを学んでもらうと共に、今の大人が望んでも出来ていない戦争や核の廃絶を、いかに実現していくかに注力をして交流学習や世代間連携学習を進めていく事に意義を感じている。

今後はより進んで、国際的な事業に取組を広げることも考えていきたい。

第３号様式（第４関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	渡辺　進二郎

１　視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）

「長崎市平和都市交流事業」（11月８日，９日）

２　実施結果に対する所感，意見等

（質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）

今年度，調布市議会では，初めて超党派で「平和都市交流事業」として，長崎市を訪問させていただきました。

長崎市に原爆が投下されて77年になります。私は，令和２年８月９日に長崎市の「原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」に長友市長と参加させていただいた際，その式典の中で，身を持って感じた身体の感覚は，言葉では言い表せないものでした。その時，長崎市さんの平和への取組を，是非，調布の多くの議員の方々に知ってもらいたい，長崎市さんとの平和の交流を深めるべきとの思いが募りました。そして，この式典に参加させていただいた事が，今回の「長崎市平和都市交流」への足掛かりとなったと，実感しています。

今年度は，中学生が平和教育の一環として，初めて長崎市を訪問し，長崎市の中学生との交流が出来ました。これまでは，広島のみの訪問でしたので，今後は，是非，長崎市への訪問も加えて欲しいと思います。

長崎市は，小学生，中学生，高校生とそれぞれの世代に合わせた学習を行い，平和の大切さを次世代へ継承しています。

原爆投下から77年が経過し，歴史を語れる方々が毎年少なくなっているのが現実で，それは大きな悩みになっているそうです。

そこで，長崎市では，平和の取組として，被爆を経験していない若い世代が被爆体験を語り継ぐ，「家族・交流証言者」の継承を望む被爆者（自身の被爆体験を託したい方）の募集を行い，被爆の事実の風化を防ぐための事業として，新たに加えました。

長崎市の平和への取組を聞き，その実態を視る事ができ，調布市として，行政・議会，そして何よりも子ども達の交流の大切さを強く感じました。

原爆の被害は広島だけではない。長崎市も同じ原爆の大きな被害を，大きな痛みを受けたという事を，私たちは忘れてはならないと強く思いました。

3　その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

第３号様式（第４関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	雨宮　幸男
１　視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）		
＜長崎市との親善・交流視察		
２　実施結果に対する所感，意見等 （質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）		

１，初日は同市が取り組んでいる平和行政「平和の文化の醸成」について
＊平和事業の取り組みの歴史とともに、未来に向けての新しい課題意識のもとに、平和の文化認定事業を展開。「平和の文化」の概念を確立し、その概念のもとにスポーツ・文化の様々な入口を通して、多くの人々が当事者として平和について考え、平和の輪を広げる活動に共感と感銘を覚えた。
＊どこの地域でも原爆被爆者の高齢化と、後継者の育成に苦悩しているだけに、長崎市の取り組みを驚きをもって聞き、見ることができた。
＊調布市でも原爆被害者団体の運動が続けられているが、先細りに苦労していると聞く。
＊長崎市に倣って、新しい事業展開を市議会・行政としても探求することの重要性を改めて感じさせられた！
＊因みにＲ３年度決算で、平和事業全体の事業費は 4.3 億円、「平和行政」の事業費は約 3000 万円とのことである。

２，２日目は軍艦島観光と長崎市恐竜博物館等による産業振興の取り組みである。
＊軍艦島は、一旦は廃墟と化していた「端島」が世界文化遺産に指定されたことを契機に、軍艦島（端島）を活用した地域振興事業である。
＊長崎市恐竜博物館は旧高島炭鉱の地下 900 メートルの場所から、恐竜の化石が発見された事が契機となって、平成 29 年 2 月に長崎市野母崎地区に建設が決定された社会教育施設で、非常に夢とロマンに満ちた施設であった。
＊長崎市では軍艦島ツアーと恐竜博物館を結んだ、新しい観光ルートを設定

して産業振興の一助にしようとしているようだ。

＊調布でも国指定の下布田遺跡の整備が計画されているが、同遺跡と周辺や深大寺地区の歴史的遺構や建造物をルート化した、観光ツアーを検討することの必要性が示唆された一時であった。

以　上

3　その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

第３号様式（第４関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	川畑英樹

１　視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）

令和４年11月８日（火）～11月９日（水）

令和４年度長崎市平和都市交流視察

２　実施結果に対する所感，意見等

（質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）

●平和施策・長崎原爆資料館

長崎に原爆が投下されて77年、多くの犠牲者を出して悲惨な惨状となった被爆地長崎の平和施策に、初めて調布市議会として視察を行った。

長崎市の被爆地の象徴でもある一本柱の鳥居・被爆くすのき・平和記念像などを廻った後、長崎原爆資料館に向かった、原爆資料館で、レクチャーを受けた。長崎市は、（核兵器のない平和な世界）実現のため長崎が貢献することとして、これまで重点として取り組んできた「被爆の実相と継承」と「核兵器の廃絶の推進」の２つの柱に加え、より多くの人が自分の興味のある分野や身近なところから平和について考えられるよう、スポーツや芸術を入り口として、「平和の文化の醸成」を加え取り組むとした。平和の輪を広げる取り組みとして、ピースなＴシャツ長崎から世界へは、Ｔシャツ2000の売り上げの500円を平和慈善団体へ寄付など、様々な身近な事業を展開している。平和の新しい伝え方として応援事業では、被爆の実相や核兵器について、より多くの人に届くように新しいアイデアなどを、広く募集し最大20万円を補助する事業では、プロのカメラマンによる学生に教えながら平和について学ぶが選ばれている。など、被爆体験などを受け継ぐ取り組みがされていた。

調布市においても、ピースメッセンジャーの派遣事業で交流がある。長崎の青少年ピースフォラムで全国から18の自治体178人が参加して被爆体験の講和を聞くなど平和について１泊２日で、行っていると聞いた。

九州・熊本出身の私は、何度となく長崎を訪問している。長崎原爆資料館に何度来ても、心が苦しい思いがしてならない。昔、被爆者の知り合いのおばあさんが原爆の事を「ピカドン」と呼んでいた「とにかく熱く痛く、水を

欲した方々の死体が川に浮かぶ地獄絵図の惨状だった」と語ってくれていたのを思い出す。

長崎市の田上富久市長は平和宣言の中で、核保有国の首脳に向け「どんなことがあっても核兵器を使ってはならない」と強調。ロシアのウクライナ侵攻に触れ、「核兵器によって国を守ろうという考え方の下で、核兵器に依存する国が増え、世界はますます危険になっている。持っていても使われることはないだろうというのは、幻想であり期待に過ぎない。『存在する限りは使われる』。核兵器をなくすことが、地球と人類の未来を守るための唯一の道である。と訴えている。

原爆資料館の入り口に、「長崎を最後の被爆地に」とメッセージボードがあった。いつも長崎に来ると、平和のありがたさを、尊さを感じるところである。改めて平和の大切さを学ばせていただいた。

●端島（軍艦島）を活用した地域振興の課題と今後の展望について

世界文化遺産軍艦島を視察した。南北に約 480m・東西に約 160m周囲約 1200mという小さな海底石炭の島でその中に高層の鉄筋アパートが立ち並ぶ、その外観が軍艦「土佐」に似ていることから軍艦島と呼ばれている。

最盛期の 1960 年には約 5300 人もの人が住み、当時日本一の人口密度で、1 メートル四方に 20 人以上が住んでいたとの事である。島内には、小中学校、病院、映画館、パチンコなどの娯楽施設等があり、生活の全てが島内で補うことが出来る。1974 年閉山し 2009 年まで無人島となって廃墟状態であった。2009 年に一般の方の上陸が可能となり、2015 年には世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産～鉄鋼・製鉄・造船、石炭産業」として正式登録された。現在、多くの観光客が上陸している。2017 年には、291665 人過去最高の上陸者を記録している。

石炭産業の繁栄を時代を、記録した軍艦島だが、長い間無人島であったことでの風化が進み傷みがひどく、何とか保全を保っているが、半ばくずれかかっているところが多数ある、周りが海で、常に潮にさらされているため、いつまでもつか、世界文化遺産の保全、観光客の安全に、大変であると感じた。

3　その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

本文中に記載。